教区だより

2016
6月
第332号

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

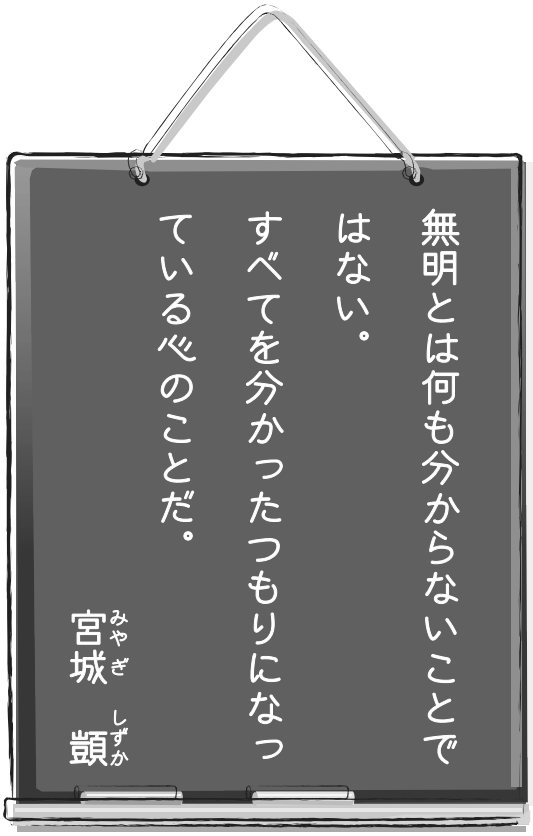
3 特集 「葬儀のかたち⑦」
第７回は近江第８組本念寺の取り組みを特集します。

4 雑宝（ざっぽう）
～私を歩ませた言葉～
【筆者】山城第１組　寶蓮寺　衆徒
原田（はらだ）　大樹（だいき）　氏

5 連載 大乗仏教―釈尊観の深化（しんか）―
《第３回》仏弟子たちの探求（１）
織田（おだ）　顕祐（あきひろ）　氏

6 今という時代／出会いの窓

7 京都教区教化レポート（靖国問題学習会）



■■■京都教区の動き■■■

得度学習会

三月二十九日（火）～三十日（水）の二日間にわたって、京都教区会館を会場に得度学習会が開催されました。

今年度の参加者は二十八名（十四歳未満が十二名、十四歳以上が十六名）。教区教化委員会委員（藤浪遊氏、村上宗博氏）より「得度の意義について」のテーマで講義を受け、本山堂衆（藤井玄珠氏、泉康夫氏）より「声明」と「装束作法」について学びました。

参加者は緊張しながらも真剣な態度で各講義を受講し、二日目午後に行われた得度考査に臨みました。

（駐在教導　梅溪）

親鸞ウォーク

四月八日（金）、岡崎別院で開催されている親鸞ウィークの一環として親鸞ウォークが開催された。今年のテーマは真宗各派の本廟参拝。東本願寺御影堂門前に集合し、まずは本願寺派の大谷本廟へ向かった。次に興正派の霊山本廟へ向かったが、清水寺、三年坂から二年坂を経て高台寺、円山公園に至る散策路の中間に位置しており、初めて参拝したという方が多かった。その後、大谷派の大谷祖廟、法然上人御廟の知恩院、仏光寺派の仏光寺本廟を経て岡崎別院に到着した。参加者は三十名を超えた。

（京都教区仏教青年会副会長　本多　真）

教区同和協議会学習会

四月十四日（木）教区会館において、同和協議会学習会が開催された。講師に石元清英氏（関西大学教授）をお迎えし、「同和教育再考～部落差別の現在をどう教えるのか～」のテーマのもと、はじめに学生たちの部落問題に対するイメージが極端に一面的であることを例に挙げ、部落差別問題の語り方の問題性を指摘された。また、misogynyという言葉を〝男性優位の潜在意識〟として取りあげ、身近なところから人権意識を考えていくことが大切であると話された。

（編集委員　藤川）

お寺の子ども会サポート研修会

四月十八日（月）、教区会館において、青少幼年研修小委員会主催で、第三回「お寺の子ども会サポート研修会」が開催された。参加者は十九名。「絵本と触れあう」と題し、真宗大谷派青少幼年センターより、松下蓮氏をお招きして、絵本の読み聞かせや選び方等を学んだ。

大人が読むだけで子どもは、楽しい、悲しい、相手を思いやるといった気持ちを持って、絵本の中に入りこんでいく。だから、状況にあわせて絵本を選ぶ事が大切である。また、お寺の隅に常置しておくと、子ども達は、いつでも落ちついて見られるので、お寺に足を運びやすくなるのではないだろうか。

最後にグループに分かれて、参加者を子ども達に見たて、読み聞かせの実習を一人づつ行って、研修会は終了した。

（青少幼年研修小委員会委員　高木　康子）

特集　葬儀のかたち⑦

近年の社会状況、生活様式の変化により、葬儀の形式もまた変化しています。教勢調査の結果からもこの15年間の葬儀に関する変動は顕著に表れ、葬儀のセレモニー化、個人化等多くの問題を抱えています。私たちはこの変わりゆく葬儀を取り巻く環境とどう向き合うのか、具体的な事例を紹介することで葬儀のかたちを考えてみたいと思います。

「葬儀ホールで葬儀したら、年寄りはそこまで行けへんからお別れ、できひんもんなぁ」と答えて下さったのは、住職横田眞氏と責任役員の田附金一氏。

今回は近江第八組本念寺のお二人にお話を伺った。本念寺は静かな田園風景が残る、滋賀県東近江市五個荘にある。集落の名前は河曲町。一村一カ寺のかたちが今も残る地域と聞けば、昔からの「葬儀のかたち」がきちんと継承されているのだろうということは想像するに難しくはない。

葬儀は十軒程度で構成される隣組がすべて取り仕切る。つまり、寄り集まった隣組のメンバーは葬儀委員長を決め、役割分担し、葬儀の司会、寺の備品である葬儀壇の組み立て、受付、買物、参列者のお茶出し、納骨のためのお墓の掃除まで、様々と仕事をこなしていく。逆に葬儀社は寝台車、霊柩車を出して蝋燭と線香を用意してもらう程度なのだとか。

当然、隣組の負担は大きく、二日間は仕事を休む必要がある。そのことを質問すると、「まぁ、仕方がない。お互い様なのだ」と。また職場にも「河曲はこんなもんです」と言うのだそうだ。ただ辻火や松明、提灯などの葬列が無くなるなど、これでも三十年前より随分楽になったとのこと。

ここまで聞くと、前述の通り「昔のかたち」が最小限の変化で継承されていると考えてしまう。が、しかし、驚くべきことに、この河曲の集落は昭和四十年代後半から増え始め、もとの住民の三倍程にまでなっている。入ってきた人数が、元の住民の倍以上になっているにも関わらず、今までの葬儀が色濃く残っている。葬儀をホールで執行する人は一割程度なのだという。大半は自宅もしくは寺で葬儀をされる。

最近、よく耳にする「周りに迷惑をかけるから、ホールで」と言い出した方には、「みんな、お返しをしたいと思ってはる。すまんな、すまんな、って言うてたらええねん」と寺でやるように勧めたのだそうだ。

冒頭の、ホールで葬儀を出すと行けない人も多くいるから、というのも地域で葬儀を出す理由になるのだろう。河曲では、たとえ葬儀がホールで執り行われても、出棺後、霊柩車は本念寺境内まで回される。そこで住職が偈文をお勤めし、最後のお別れをするために、葬儀ホールに行くことができなかった集落の方が集まられる。

河曲では、元々の門徒も、入ってきた住民も葬儀が共同体としての集落の大切な行事として位置づけられている。すべての人が門徒であるということではないが、共同体としてのつながりが、今も非常に大切にされている。住職も含め、みんなでその共同体を維持することに知恵を出し、エネルギーを費やしておられた。夏休みの小学生のラジオ体操から正信偈のお稽古、宿題は平日毎日。納涼祭、河川掃除、運動会、新年会。隣組単位で寄り合い、交流しましょうと呼びかけ、場が開かれるように手を打っておられたのだ。だからこそ、そこで育まれる豊かな人間関係が、最後のお別れはしたいという願いとして、河曲という共同体を支えているのだと思う。

（取材・編集　出版小委員会）

雑金

山城第一組　寶蓮寺　衆徒
原田　大樹

「孤独であっても孤立しているわけではない」

今から三年前の三月七日に私は得度式を受け、僧侶となるご縁をいただきました。私は家がお寺ではなく、真宗の教えというものに出会うきっかけもなく、そもそもそれ自体も知りませんでした。

私は大谷大学に通っています。大学に入学したのが二〇一一年で、あの東日本大震災が起こった年でもあります。正直、当時は他人事のように「大変そうだな」とこれくらいのようにしか思っていませんでした。たまたま仲良くなった友人が福島県出身で「いってみたら？」と勧められ、初めて被災地に支援活動に行きました。言葉にならない衝撃とはまさにこのことだと、一気に今までの考え方をひっくり返されたような感覚でした。その時の光景、出会った人たちのことははっきりと覚えています。それから今でも不定期に東北で支援活動のお手伝いをさせていただいています。被災者、支援者と様々な立場の人たちとたくさん出会いました。さらに、出会いという意味、素晴らしさを深く受け止められたような気がします。そして支援活動をしている中でいろいろな状況で生きている人たちと関わりを経て、震災、原発事故は何も他人事ではなく、私自身今をどう生きるかと考え始め、真宗門徒になるきっかけとなりました。

しかし、自分を見つめるというのは厳しいものでした。それまで私は人に合わせて、自分から逃げてばかりで向き合おうなどとは少しも思ったことはありませんでした。そのせいもあって深い関係の友人がいませんでした。何に関しても理由をつけて自分ではないもののせいにして、つまり反省をしてこなかったわけです。

ところが真宗の教えを学んでいるうちにそのままの私でいいのだと、あるがままでいいのだと聞き、その時に、感覚ですが、胸を打たれたようになり、今までの自分が恥ずかしく思えてしまいました。正直かなり落ち込みました。自分の生き方を否定されたのですから。しかし、視野が広がったことで見えてくるものが全然違いました。立場や状況が違っても悩み、苦しみを持っている人たちと繋がり、共感しあえる関係があったのです。今までは、この広い世の中をひとりで生きていくのだろうと思っていました。実際は誰も一人では生きていけない。一人であっても一人ではない、孤独であっても孤立しているわけではなかったのでした。

震災を通して人と出会い、真宗の教えに出会い人生が大きく変わったわけですが、今をどう生きるか。これは常に問い続けるものであると思います。誰もが混迷する時代社会を生きています。津波被害は落ち着いたように見えても、原発事故は今後どうなるかわからず、人々の心の傷も癒えていません。それらのことをまったく自分と関係がないとするのではなくて、それらのことも含めて共に同じ時代社会を生きる我々のことなのだといただくのが、私たちにとって大事な立ちどころではないかと思います。

大乗仏教
―釈尊観の深化―

第３回
仏弟子たちの探求（１）

織田　顕祐
（大谷大学教授）

釈尊の入滅によって、依りどころの原点である仏法僧の三宝の一つを失った仏弟子たちにとって、「ブッダ」とは何であるかという問いは、極めて切実なものだったはずです。この点について、仏弟子たちの間には大きく二つの考えかたがありました。要するにブッダ釈尊を一人の「人」と考えた人たち（前回、実在主義と呼びました）は、肉体の消滅をもってブッダ釈尊の消滅と見たのです。これに対して、釈尊のような一切衆生を救済しようとするような大悲の存在が、通常の人間と同じように入滅して無に帰するとは到底考えることのできなかった人たち（前回、讃仏主義と呼びました）は、必然的にブッダ釈尊の超越性を探求することになりました。

前者の実在主義に立つ仏弟子たちは、「自らをともしびとせよ、法をともしびとせよ」との遺言にしたがって、残された教えと戒律が自分たちの依りどころであると考えました。そして、この中にブッダを見ることによって壊れることのない自分たちの依りどころと考えたのです。釈尊は、自我に対する執着がさまざまな問題の根源にあるとして、縁起・無我の道理を明らかにされましたが、そのために、五蘊（色・受・想・行・識）という概念を用いられました。これは人間存在を五つの要素に分析し、その中のどこにも「我」は存在しないという教えで、常に釈尊が出家の仏弟子に教えていたものです。その人間観に習って、この実在主義に立つ仏弟子たちは、仏の教えである戒・定・慧の三学、それによって獲得できる解脱と解脱知見（解脱したことを明らかに知る智慧）の五つの要素によって仏の身体は成り立っていると考えました。これを後世、「五分法身」と言いますが、ブッダの身体が法（ここでは釈尊の教えを指す）によって成り立っているという考えに他なりません。

後者の讃仏主義に立つ仏弟子たちは、釈尊の身体的超越性や内心の超越性などを具体的に説き出しました。前回述べた「三十二相八十随形好」といったブッダに固有の身体的特徴や、十力・四無所畏・三念処・大悲といった、いわゆる「ブッダの十八不共法（ブッダにだけ備わった十八の優れた功徳）」などが、阿含経のいたるところに説かれています。極端な例では、ブッダの用便まで金色に輝き芳しい香りがしたと説かれているような教説もあります。このようなわけですから、阿含経に説かれていることの全てが歴史上の一人の人物としてのブッダ釈尊のそのままの言行録というわけではありません。

阿含経を通して知ることができる仏弟子たちの釈尊観を、ごくかい摘んでまとめてみました。このような二つの態度が基盤となって、時間を経て、阿含経という経典になっていったのです。それゆえ、阿含経は「釈尊が説いた経」とは言っても、私たちが通常考えるような歴史上の人物としての釈尊の生の記録というわけではありません。そこには歴史的な出来事を通して普遍化されたブッダ釈尊が説かれているのです。

今という時代

「れんにょしょうにんさまの～おとおり～」

今年も四月十七日、蓮如上人御影道中が真宗本廟を御出立された。毎年、吉崎別院で厳修される蓮如上人の御忌にあわせて、御影が京都と吉崎を行き来する。御下向が七日間、御上洛が八日間という日程は、体力的にも精神的にもかなり追い込まれる、非常に厳しい行程である。一行の休憩場所や宿泊場所もそれぞれ受け入れ態勢を整え、御影道中をお迎えする。道中の近隣の寺院にとっては、春の大きな行事として位置づけられている。

昨年、御上洛の休憩場所で随行教導のご法話を聞かせて頂いた。随行の教導の任に当たられる方は、一日に何度もお話をされる。そこでの話である。

以前、教団問題で宗門が荒れていた時期のことである。御影道中に使われていた蓮如上人の御影が裁判の結果、大谷家の所有とされた。そのため、御影を新たに準備して御影道中を実施していたのだそうだ。そのとき、あろう事か、係争で手に入れた御影をわざわざ持ち出して、御影道中の前を歩き出したというのだ。「こちらがほんものの御影ですよ」と。その時、同行の方々、居合わせた人に動揺が広がった。たまたま居合わせた、その教導さんにご門徒の方が聞かれたのだそうだ。「どちらが、ほんものですか」教導さんはそのとき、「苦し紛れ」とおっしゃったと私は記憶しているが、「時間が解決するでしょう」とおっしゃったそうだ。

時が流れ、今、前を歩く「ほんもの」の蓮如さんはもうおられない。

ご法話の最後に、「御影道中は、掛け軸が動いているのではないのです。蓮如上人が歩いておられるのです。蓮如上人の言葉に出遇った人が、蓮如上人を支えている。その姿が御影道中なのです」と。

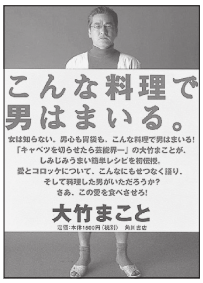
私が「ほんとう」だと思っている事柄や、考え方はかなり怪しいのだろう。また「ほんもの」だとか「ほんとう」を成り立たせているもの、根拠を見抜くことができず、見誤っている。

今年、四月十七日、ご一行宿泊先の等正寺へお参りさせて頂いた。住職にお話を聞かせて頂くと、人数も随分少なくなってきたとのこと。その時、今年は芦原のお同行〇〇さんもお見えではないと話された。ふとした拍子から出たその方が、御影道中では有名な方と伺った。食事も睡眠も本堂には上がらず、夜も軒下や樹木の下で過ごされたのだそうだ。

おそらくその方が、自らの身を通して聞かれた、蓮如上人の言葉。その言葉と身の接点のところに、「ほんとう」はあったと思う。そこで出遇ったことが御影道中を支えている働きとなっていることは事実である。軒下や樹木の下で過ごす姿に目を凝らしたときに「ほんとう」を垣間見ることがあるかもしれないが、ずれることもあろう。それは、その姿そのものに「ほんとう」を見たと錯覚してしまう。確かに出遇ったという人の頷きと蓮如さんの言葉の接点にのみ「ほんとう」が感じ取れることがあると思う。

（編集委員　沙加戸　崇）

出会いの窓



『こんな料理で男はまいる。』（大竹まこと／角川書店）

テレビで見せる切れ味鋭いトーク、ラジオでの朴訥とした語り口、はたまた舞台で観客を爆笑させるコメディアン。多様な顔を持つタレントの大竹まことは、私にとっては、料理人でもあります。食えないヒモ暮らし時代に覚えたという料理は、素早く簡単にできるものばかり。味を足し過ぎず、素材を大事にしたレシピは、ただ焼くだけのものも。どれも作りたくなること請け合いです。『米を10回炊く。味噌汁を10回作る。とにかく「続けて10回！」やればコツをつかめる』。お勧めはJJ風サラダ。あの有名焼肉店のドレッシングの味が再現されています。著者の人生哲学が感じられるコラムがまた面白いです。

（編集委員・本多　真）

京都教区教化レポート

【靖国問題学習会】

ブッダが「国が豊かで民が安らかに暮らすとき、そこには兵隊も武器もいらない（兵戈無用）」と説かれる『仏説無量寿経』の阿弥陀の本願をいただかれた親鸞さんは、娑婆に起こるさまざまな現実に向き合い、民衆と共に生きられました。しかし、かつて私たちの大谷派は近代に入って親鸞さんの教えに背き、戦争を肯定して、一九四五年八月一五日の敗戦の日まで侵略戦争に協力していきます。靖国神社は戦争で戦死した兵士だけが祀られ、顕彰される施設です。

これらのことをふまえて当学習会は、靖国神社やさまざまな現実（部落差別、原発、沖縄問題、非戦等）を課題として、学習を重ねてまいりました。ここ三年間は、大谷派が戦争を肯定し協力していった時代に、非戦平和をつらぬき、親鸞さんの教えに生きられた、高木顕明氏・竹中彰元氏・植木徹誠氏に学ぶことをテーマに、資料の輪読、公開講演会の実施、現地学習会をおこなってきました。その集大成として、三年間の講義録を冊子として発刊する作業をいま進めています。当学習会としては四冊目、年内には発刊の予定です。

（靖国問題学習会代表　谷口　勇二）

事務連絡

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

丹波第一組　正願寺坊守　菅原　智恵子
二〇一六年三月十二日　六十四歳
〔敬称略〕

《二〇一六年度京都教区教師試験検定準備学習会について》

期　間　二〇一六年七月二十五日（月）～三十一日（日）
会　場　京都教区会館
科　目　声明作法・仏教学・真宗学・教化・法規
対象者　本山で行われる『夏期教師試験検定』の受験希望者
申込締切　七月十一日（月）まで
※詳細につきましては、「教区だより」に同封しております、開催要項・日程表をご参照ください。

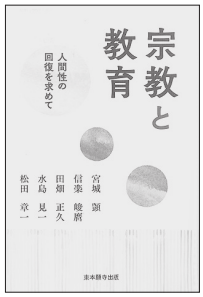
《夏期教師試験検定について》

検定日　八月二日（火）・三日（水）
会　場　真宗大谷派宗務所
科　目　真宗学・仏教学・教化・声明作法・法規・口述試問
受付期間　七月一日（金）～八日（金）
問い合せ　真宗大谷派宗務所　教育部
※詳細につきましては、機関誌『真宗』五月号をご参照ください。

《東本願寺出版刊行物のお知らせ》

『宗教と教育
―人間性の回復を求めて』

「宗教教育」とは何か―人間のあり方を見つめ直す「宗教教育」の意義を明らかにする一冊。



著者　宮城　顕
信楽峻麿
田畑正久
水島見一
松田章一
価格　一四〇四円

■京都教区教化テーマ■

今、いのちがあなたを生きている

聞こえますか いのちの声　感じますか いのちのぬくもり

◆教区事業予定

6月　6日（月）	13：00～17：00	同和協議会学習会	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
6月　7日（火）	14：00～17：00	教区緊急事態対策委員会	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
6月　9日（木）	13：00～16：30	出版小委員会	会場◇教区会館３Ｆ	会議室
6月１３日（月）	13：00～15：00	門徒・推進員等研修小委員会	会場◇教区会館３Ｆ	会議室
6月１４日（火）	13：00～17：00	教区同和協議会総会	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
6月１５日（水）	18：00～21：00	児童大会全体スタッフ会議	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
6月２３日（木）	14：00～	教区教化委員会総会	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂

◆地区・団体事業予定

6月　3日（金）	13：00～17：00	坊守会（本部役員会）	会場◇教区会館３Ｆ	会議室
6月　6日（月）	16：00～18：00	准堂衆会	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
6月　8日（水）	9：00～16：00	坊守会真宗基礎講座	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
	10：00～12：00	教区推進員協議会三役会	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
6月１０日（金）	13：30～17：00	教区合唱団	会場◇教区会館２Ｆ	大講堂
6月１４日（火）	13：00～15：00	准堂衆会（女性対象声明会）	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
6月１５日（水）	9：30～16：00	坊守会	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
6月２１日（火）	18：00～21：00	仏青声明会	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
6月２２日（水）	15：30～18：00	大谷保育協会京都支部	会場◇教区会館３Ｆ	研修室
6月２８日（火）	13：00～17：00	坊守会（本部役員会）	会場◇教区会館３Ｆ	会議室

「教区だより」第332号

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

発行日　2016（平成28）年6月1日
発行人　磯野恵昭（真宗大谷派京都教務所長）
発行所　真宗大谷派京都教務所
〒 600－8164
京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel：075（351）5260
Fax：075（351）5256
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp
ホームページ：http://www.k-kyoku.net/
印刷所　（有）寶印刷工業所

the editor's note　編集後記

先日、2歳の息子と京都市動物園へ出かけた。動物とふれあえる場所で、彼は自分よりも大きなヤギの背中にタッチした。数週間前に来た時は近寄るのも躊躇していたのに。その夜、母親にそのことを嬉しそうに何度も話す姿が印象的だった。▼どんなに小さなことでも、できなかったことができるようになることは喜びだし自信につながっていく。▼目の前の状況が劇的にガラッと良くなることはない。良い方向へ少しずつコツコツと努力をしていくしかないのだと息子の声を聞きながら思いました。　（編集委員　本多　真）